

合同

No. 484

「救いに導く知恵を」

つるかわ台教会牧師

三浦 寿夫



2025年1月15日で日本キリスト合同教会は40周年を迎えます。イスラエルの信仰においては、40年とは、荒野の訓練の期間でもあります。合同教会のこれまでの来し方を振り返ると、さまざまなことがありました。良いことばかりではなく、多くの試練を通してきたと思います。その意味では、鍛えられた40年でもあったと思います。そして、置かれた時代の中で、懸命に役割を担おうと、みんなで努力をしてきたと思います。そんなわたしたちが、委ねられた主のご委託に応えるために、新しい革袋として、どうフォーカスしたら良いでしょうか。

最近、わたしたちの教会のまわりでは、離婚を始めとして、問題を抱えている家庭が少なくありません。その様子を見ながら、価値観の多様化と言いながら、その実、人が人として生きていくための指針や基準が失われているように感じます。

子どもたちの未来を思うときに、保護者の方も含めて、福音を届けたいと思います。神にある人間観、人格の関係、社会秩序、福音はこれらの基準をもたらすと信じます。教会は現代の社会にも大切な使命を担っていると思います。

人々が、イエス・キリストを通して神を知り、神の愛を知ることによって、祝福の中を生きるようになること、これが神の願いですね。信仰者が祝福の源（創世記12章2節）として、共に生活している人々と神にある祝福を分かち合う、これが教会の使命です。

聖書は、こう語っています。

「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたがたに与えることができます」（テモテへの手紙2章15節）。

み言葉の力がここにあると思います。聖霊の導きによって、聖書のみ言葉は、キリスト・イエスへの信仰を持つものを、救いに導くことができるということ。これをまず身の回りの人々と分かち合うようになりたいですね。

そして、続けて**「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」（同16節）。**

聖書は、わたしたちを造り、愛しておられる神の霊の導きによって書かれました。

わたしたちを慈しみ、育てようとしておられる神が、わたしたち人間をどう見ておられ、どう育てようとしておられるのかが、たくさんの事例や言葉によって表現されています。そしてみ子の姿に似たものとされることも書かれています（ローマの信徒への手紙8章29節）。

いま人間観が混沌としています。多様であることは良いことですが、それを生かす一致したモラルや社会秩序が不在です。戒められたり、正されたりが苦手な時代です。人々はその結果としての混沌に傷つき、どうしたら良いのか分からずに苦しんでいます。その人々に、神を知らせることがわたしたちの務めです。

聖書は、イスラエルの歴史を通しての多くの人生の教訓や、知恵の宝庫です。また主イエスが教えられた福音の真理にあふれています。そこには、神の義が貫かれています。この大きな恵みである書物は、人のあり方を教え、家庭の関係を教え、社会の関係を教えています。現代社会の多くの問題を、明らかにし、方向づける基準が、ここにあるのではないのでしょうか。

わたしたちは、信仰を与えられ、聖書によって育てられてきました。それによって祝福の歩みが続けています。困難があっても、病を得ても、痛みがあっても、苦しみの中でさえ共におられ、生きて働かれる義なる方によって生かされています。そして、慈しみと訓練を受けながら、より自由な魂へ、主イエスに似たものに育てられていきます。

この時代の中で、この聖書の価値観に基づく生き方をもっとアピールしても良いのではないのでしょうか。生き方が見えず、生きあぐねている人々の声に